

記憶の欠片

山本 安彦

ほんとうにそこにいたのだろうか
テニスコートにいるぼくを校舎から
手を振っていたきみ
無視してぼくはその試合に負けた

ほんとうにそこにいたのだろうか
正門へと続く坂道で朝陽がきれいときみは言った
朝陽に焼ける山々を見てぼくはきれいと言った

大切な話があるからと
誰もいない教室で話しかけてくれた
あふれる笑顔で、ときに真顔で

(私は そのひとが蛾を追う手つきを あれは蛾を
捉えようとするのだろうか 何か いぶかしかった)

差し入れてくれたサンドイッチ、おいしかったよ
香りのついた便箋に綴られた手紙が懐かしい

彼方からの風が通り過ぎていく
どこかのまちで暮らしている
きみの気配をさがす

記憶の欠片はいつも美しく
ぼくを前に進めてくれる

ほんとうにきみは
そこにいたのか

* () 内は、立原道造の詩「はじめてのものに」から